

まとめ

2018年度の天文学に関する技術シンポジウム(以下、“技術シンポ”と呼称)は当初、国立天文台技術推進室の判断により開催しない方針でした。その方針とは、「国立天文台の将来を見据えた技術力向上に対応できるものとして開催するためには時間が不足するため」でした。しかし、技術推進室の決定に対して国立天文台技術系職員会議にて様々な議論を行い、

- 1：技術シンポを今年度開催する。
- 2：来年度の方向性を世話人会と推進室で検討する

事になりました。

2018年10月に国立天文台技術主幹より世話人に対して『技術シンポについての考え』が示され、その中で「国立天文台のリソースを使用している観点から国立天文台の目指す方向（大型観測施設の建設運用）に沿っていることが期待される」とされました。

ここ数年、本シンポジウムでは、参加者がより多くのものを得られる“場”を提供することを心がけておりまして、本年は、「技術を持つ者と欲する者をつなげる場の提供」をメインテーマとし、一般発表を、「技術情報提供」「アドバイス求む」「コラボレーション事例」「その他」の四つの観点で募集しました。一方で、世話人企画として上記の『技術シンポについての考え』を一部取り入れることにしました。世話人企画では「日本の天文学に関する技術の問題点と将来像」をテーマに参加者によるグループディスカッションを開催し、その基調講演として常田台長と本間水沢 VLBI 観測所長に講演を依頼しました。

講演件数は、口頭発表は25件（発表12分間、質疑応答3分間）、ポスター発表は20件（3分間のショートプレゼンテーションあり）でした。参加者は78名（うち台外参加者は20名あまり）で、数字で見るとは歴代最多の参加者数であり、大変に盛況でした。

アンケート回答結果も概ね好評であったため、課題は残るものの、少なくとも来年度につながるものになったように思われます。

最後になりましたが、本シンポジウム開催にあたり、参加して下さった方々、ご意見を下さった方々、そして御協力いただいたすべての方々に、心からの感謝を述べさせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。